

本證寺境内の発掘調査成果

鈴木 正貴

(愛知県埋蔵文化財センター調査研究主任)

はじめに

史跡本證寺境内の発掘調査は1999年に実施された第1次調査を皮切りに安城市教育委員会によって継続的に行われてきており、これまでの調査箇所は約90か所で、面積にして約2000㎡に及びます。この発掘調査では、堀や井戸などの遺構（不動産）と陶磁器や瓦などの遺物（動産）がたくさん発見されており、ここからさまざまな成果が明らかになっています。ここでは、文献や絵図などでは知り得ない

本證寺境内の様子を2つの視点から説明していきたいと思います。

1. 遺構からみる城郭伽藍の形

本證寺は三河一向一揆の拠点寺院の一つとして著名であり、実際に今も高く残っている土塁や水を湛えている内堀などは、現地で城郭寺院の片鱗を知ることができる遺構です。こうした堀や土塁が全体としてどのように縄張り（配置）されてきたのかについ



図3 発掘調査で確認された戦国時代の遺構（堀）

ては、現地に残る遺構のほかにも本證寺所蔵の『本證寺伽藍絵図』や明治時代以降に作成された地籍図などのさまざまな史資料を参考にして、復元が試みられてきました。現在、本堂と庫裏を囲む内堀とそれに付随する土塁および本證寺境内全体を囲む外堀の二重堀が巡るといふ想定案が最も有力な説で、「本證寺伽藍絵図」を大いに参考にしたものです。

さて、発掘調査では、概ねこの想定に合う形で堀跡が発見されていますが、一部で想定とは異なる結果も明らかになっています。

中でも外堀は想定とよく合致しており、例えば北面外堀の西端部付近では、横断面が「V」字状となる幅約4.9m、深さ約2.9mの大きさの薬研堀やげんぼりである

ことが分かりました。堀底から15世紀後半から16世紀中ごろの遺物が出土したことから、戦国時代にはまさに城郭を思わせるような防御性に優れた構造であったことが判明したのです。

一方、内堀は戦国時代までさかのぼる薬研堀となる部分がある反面、例えば東面内堀（本堂地区）では、堀底が平坦面となる深さ約2.3mの大きさの箱堀であることが分かりました。この部分では戦国時代までさかのぼる遺物が全く出土していないことなどから、ここを含めた一部の内堀は江戸時代に整備された堀である可能性が高くなっています。

これに加えて、発掘調査では予想されていない場所から堀が見つかることもあります。本堂地区の南



図4 遺物出土分布（その1）土師器鍋類など

部（旧神谷家住宅主屋前）では、内堀とは全く異なる場所で東西方向に延びる戦国時代の堀が見つっています。この堀がどのように展開するかははっきり分かりませんが、その堀の続きと思われる溝が内堀南東隅部分の発掘調査でも検出されています。

このように記録や地割などでは推測することが難しい戦国時代の堀が発掘調査によって新たに発見される事例は、近世城下町ではよくあることで、戦国時代の縄張り（遺構配置）を近世の諸資料から類推することの難しさが全国各地で浮き彫りとなってきました。本證寺境内の場合でも、江戸時代の遺構配置は確定できても、戦国時代の縄張りは依然として不明な点があり、全容を把握するためにはさらなる発掘調査などが必要であるといえるでしょう。そ

して、三河一向一揆の時の本證寺境内の構造は現在わたしたちが考えている形とは少しだけ異なっているかもしれないのです。

2. 遺物からみる内部構造

発掘調査では、遺構と遺物から人々の活動の内容がある程度想定できる場合があります。

出土する遺物は、長い間土中に埋もれているので食べ物や木材などは腐食してしまい、陶磁器や石製品が多く残る傾向があります。本證寺境内の発掘調査で最も出土する遺物は素焼きの土師器鍋類です。戦国時代の三河地方の土師器鍋は、内面上端部に取っ手状の「耳」が付く内耳鍋と、外面上部に「鰐」が付く羽釜と、壺の形をした茶釜の3種類があり、本

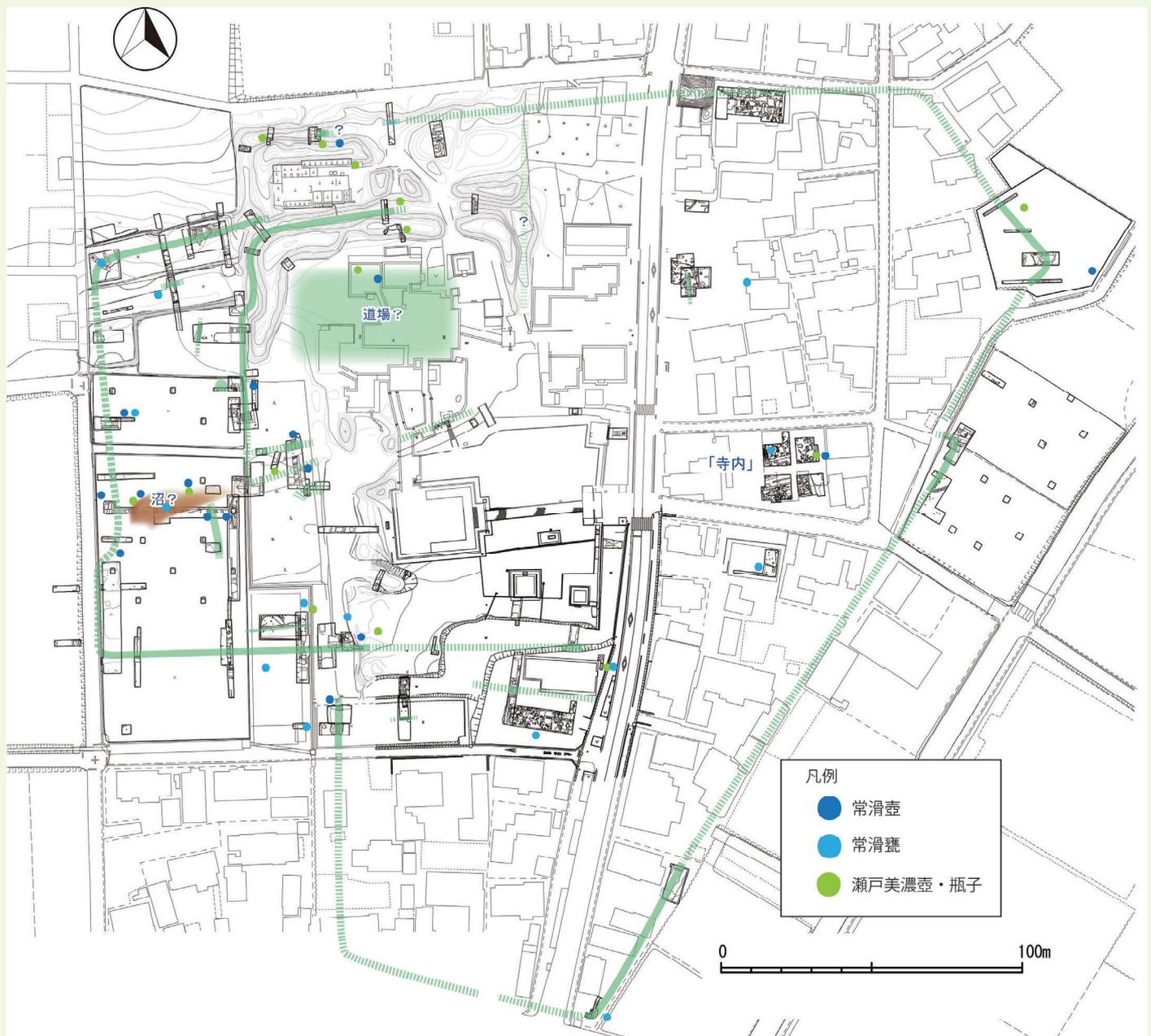


図5 遺物出土分布（その2）陶器壺・瓶子など

證寺境内では内堀と外堀の間のいわゆる寺内と呼ばれる空間でたくさん出土しています。鍋類は日常生活に直結した遺物なので、本堂や庫裏の区域で壊れた土鍋などをゴミとしてあまり捨てていないことは、当然なことと思われます。瀬戸・美濃焼の陶器の播鉢や茶碗なども同じような傾向があります。

同じ瀬戸・美濃焼や常滑焼の陶器のうち、壺や瓶類は内堀と外堀の間でも特に西半部で多く出土しているようです。壺や瓶は骨壺に転用される事例も多いことから、本證寺境内の西側のどこかに中世墓地が営まれた可能性も考えられます。

一方、庫裏周辺部で多く出土する遺物としては織豊期以前の瓦類があげられます。一般に瓦類は礎石の上に建物を建てる礎石建物の屋根の重しとして使

用されるもので、中世から戦国時代までの礎石建物は庫裏およびその周辺に存在したことが想定できるのです。おそらく、発掘調査が行われていない本堂とその周辺でも古い礎石建物があった可能性がありますが、この点についてははっきりしたことはわかりません。いずれにしても、織田信長が築城した安土城以前では、瓦は都城か寺院でしか使用されないものなので、中世瓦の出土分布は戦国時代以前の境内の建物配置を知るうえで大切な資料となっています。

次に紹介するのは、鞆の羽口です。鍛冶や鋳造などの鉄製品を加工する際に鉄を柔らかくするため高温で熱します。そして炉の温度を高めるために鞆から炉に強風を送るのですが、このための送風管が羽

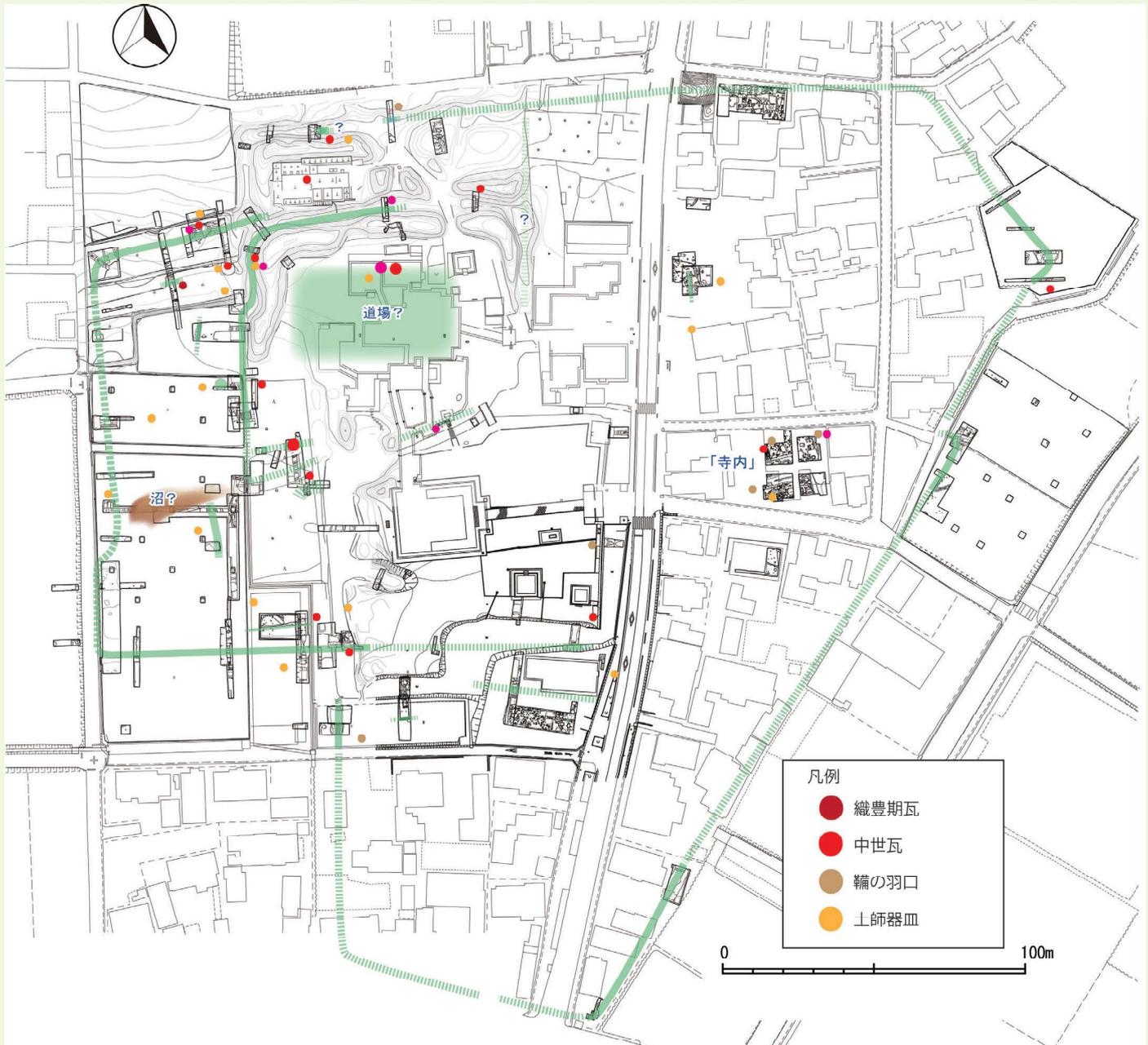


図6 遺物出土分布図 (その3) 瓦・羽口など

口です。羽口は炉に当たる先端部が溶融したり鉄滓^{てっさい}が付着したりしているの見極めは比較的容易です。本證寺境内ではこの羽口が寺内の一部の区域で数個発見されています。この付近で行われた作業が鍛冶か鑄造かはまだ特定できていませんが、寺内で金属加工の職人が活動していたことが判明しました。

このように、出土遺物を詳しくみていくと、本證寺境内でのそれぞれの区域の役割や使われ方が異なっており、場所の特色を見出すことができるのです。

最後に、戦国時代の城館遺跡との違いについて考えます。大名や家臣らがある程度居住したと思われる拠点的な城館遺跡では、城郭の中核部に近い屋敷ほどかわらけ（土師器皿）がまとまって出土することが多いです。これに対し本證寺境内では、土師器

皿は出土しているものの多量にまとまって出土する事例は皆無です。このあり方の違いから土師器皿が持っている役割を考えることができ、武家の中核部で出土する多量の土師器皿は武家儀礼で使用されたものと推測できそうです。

このように、発掘調査を詳細に検討すると、本證寺境内のさまざまな側面が徐々に明らかになってくるのです。なお、このような考察ができたのも、安城市教育委員会の精緻な発掘調査のおかげであり、特に今回の出土遺物の分布の検討にあたっては石原奈緒子さんのご尽力によって多様な成果が得られました。記して感謝するとともに、こうした地道な作業の積重ねが大切であることを知っていただきたいです。

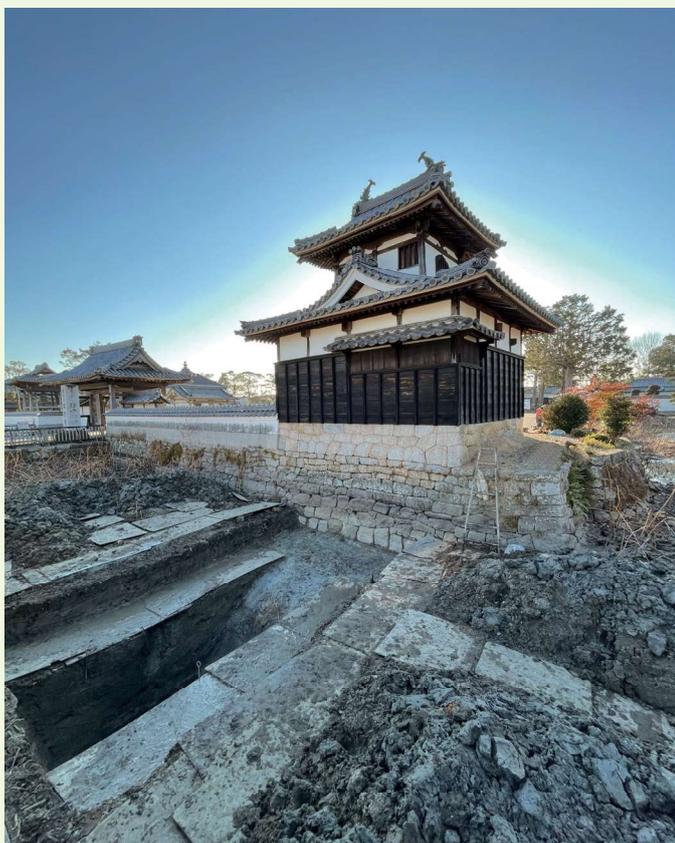


写真 12 内堀発掘状況（北側から撮影）



写真 13 北西外堀東壁（西側から撮影）



写真 14 旧神谷家住宅主屋前の予想外の堀（南側から撮影）



写真 15 鞆の羽口



写真 16 土師器鍋